新歌集

# 林深

前田夕暮

深

林

LICENSED PRODUCT

深林

前田夕暮

陸上自衛隊
第1師団
第1普通科連隊
第1中隊

# 深林

前田夕暮

# 深林

前田夕暮

此一卷を
わがこころの友に贈る

わが子「透」の第二の誕生を紀念として



# 序

「生くる日に」を出してから恰度二年になる。此間の自分の作歌の全部をとつて、此「深林」一卷に收めた。歌數からいふと五百數十首にすぎぬ。二年間の自分の藝術的努力の全部が單にこれだけにとどまると思ふと些か心淋しく思はれぬでもないが、それは量の上に於てである。藝術は量の上から評價すべきでない。萬葉

集中の歌人、其他近世の我が尊敬してやまぬ偉大な歌人ですら其生涯に千首二千首の歌をのこしてゐる人は決して多くはない。曙覽の如きは八百六十首しか遺してゐない。こう思ふと、自分のこの二年間の努力の全部の五百數十首に上るのは、量の上からいふと猶非常に多きに過ぐるものがある。

さはれ、今の自分には此一卷の中から例令一首でもさう容易には拔きさしは出來ぬやうに思はれる。量が多いからといつてより少なに抹殺するといふことは自



分の生命の一部分を剝ぎ奪られるやうな痛苦がある。自分はこのまま、此二年間の自分の努力の全部としての此一卷を我が未知の識者や我が敬愛する友の前に贈りたくおもふ。

自分は徹頭徹尾感動本位である。此一卷のうちの一首でも微かながらも自分の生命に響きをもたぬ作はない。それだけ自分の歌にたとへしもなき愛惜の心を有つ。それは餘りに自己に執してゐると嗤ふ人があるかも知れぬ。とはいへ自分は自分の生命をいとほしむと

同じに、自分の生命に根ざしたる芽を愛しみ惜しむ。

本書の標題「深林」は餘り內容を暗示してゐる題ではない。唯この集を出さうとして初めて詩歌に發表した昨年の秋から、自分の心を絕えず牽引してゐた未知の深林があつた。それは相模の北境より甲斐の國深く山から山へ涯てしなく連亘してゐる大深林である。其深林は殆んど處女林であつて、いろ〳〵な傳說をもつてゐる。自分は久しい間その深林に對する神秘的想像を



現實にせしめたいとおもひ、その深林に行きたい行きたいと絕えず思念してゐたのであるが、いろいろの障碍の爲めに果されず、本集の出る前には何をおいても行つてきたいと思つてゐた此夏でさへも、思ひがけぬ故障でとうとう行かれなかつたのである。

國境から國境へ、山から山へ、谷から谷へ、涯てしも知らず原生そのままの神秘を深くつつんで、杳として日のひとつ赤くかかる下に、宛ら深海なす濃き綠をたたへて靜もりかへる未知の大深林！自分の心は夜も

日もその神秘な原始的匂ひの強い深林に流れてゐる。そして、其未知の深林こそは常に自分の心にいひ知れぬ深い歎息と憧憬とをもち來たす。本書の標題を深林と名づけたのはこれがためである。

深更の窓の下にて

著　者

大正五年九月

## 深林目次


朝焼……一
かがやく雪……五一
土のにほひ……六九
窓……九九
榛名、赤城の歌……一一三
秋より冬へ……一三七
富士山麓の歌……一五五
發生……一七三

朝

燒

大正五年

裝幀……著者

自大正五年一月
至大正五年七月



冬日公園

冬の日のまあかく空にしづむころ白き印度の
孔雀をみたり

かはたれの緑樹(りよくじゆ)のもとの白孔雀淋しく地(つち)を踏
みにけるかも

一羽ゐて寂しき孔雀番(つがひ)ゐて更らに寂しきましろき孔雀

白孔雀翅(つばさ)地に曳き歩みけり雄(を)は雌(め)をみつつ啼きもせなくに

冬の日のかはたれごろのうす苦き味覺(みかく)かなしく白孔雀みる



冬鴉と牛

枯草の上にまだらの牛ひとつ眼鋭(するど)にわれをみまもる

仔牛ども日なたぼこしてゐたりけり吾もまじりて日向ぼこする

わが心刺すものありて日向ぼこ安らには早や
なし難きかな

枯草のにほひにまじる仔牛らのにほひをかぎ
つかなしみゐたり

我が前のま黒き牛よ物いはぬけだものの身の
汝れをいとしむ



牛飼場の女の若き笑ひ聲冬空にひびきわが心
刺す

＊

はつはつに麥ぞ芽をふき冬木立まばらに立て
る斜面の畠

くろぐろと冬の鴉の地におりてひとこゑを啼
く斜面の畠

冬鴉くろく大きく麥畑の上に影ひき飛び去りにけり

物飢ゑし心にしみてしみ〴〵と青菜畠の香のつめたさよ

*

避病舍の木立の梢ややくろみ空のもとにてひそまりゐるも



野を越えてはるかに來たる擔荷ひとつ避病舍に入り、暮れのこる路

濁川けうとく鳴りて避病舍の下をながるる冬日の暮れを

*

子供らは土手にひそまり空をみるまた一人きてならびけるかな

## 光りなく濁れる海

光りなく濁れる海のどんよりと吾にむかひて
音をひそめけれ

水脈ひとすぢなびけるのみに冬の海濁り光ら
ずわがましたなり



おそろしくしづまれる海を眼下にてわがうづ
くまる冬の斷崖

泥舟のいつよりここにありにけむ潮引きにけ
る渚にひとつ

海苔そだの黄いろく烟るひとところ海のもな
かに日が杏かなり

濁り海潮さしきたりなぎさべの泥舟に啼く一
羽の鷗

鷗らの一むれ白くかたまりて泥をついばむ干
潟のひかり

嘴紅きうら若鳥の鷗ゐて日にはばたきつ啼く
聲悲し



帶赤く、裾ながにひく女ゐて鷗みてあるは娼婦
なるべし

濁り海濁れるほとりあから裾地にひきにつつ
娼婦しづまる

## 山上疎林

冬の日のしんと靜まる山上の疎林にあはれ小鳥を殺す

ほたりほたり赤くしたたる小鳥の血しんと日のさす疎林のまひる



す黑鳥空ゆく鳥を殺したり心ほのぼのみち足らひしも

ちらちらと火は晝を燃え日の光火に照りながら寂しさまさる

焚火燃え小草燒かるるいとほしき匂ひをかげば寂しさまさる

山羊小舍小景

山羊をみにゆかまほしとてゆきにけり冬菜畠
の夕寒むのころ

しぼりたての山羊の乳のみ青空をみてありぬ
羊乳の匂ひほのかに



冷たかる一杯の山羊の乳のみつ冬菜畑の冬菜
をぞみる

初冬の愛しき午後の日の光新しき山羊の乳の
しぼりたて

冬菜畠のそばの山羊小舍冬の日の光にぬれて
仔山羊よ啼くか

山羊小舍の若き女房のこころよく肥えて初冬
の日にぬくみをり

一株の青菜をぬけばましろなる根につく土の
いとほしきかな

山羊小舍の山羊の啼く音の鋭く澄みてここに
きこえく晴れゆく冬空　林にて



淺草江川一座

冬の夜を素肌ましろの少女ゐて生命危く宙乘
りするも

十歳ばかりの少女の人をおそれざる瞳をみつ
つかなしみにけり

あなあはれ玉をまろばす少女らのみてあれば
すと彼方にすべり

あなあはれ玉をまろばす少女らの眼にはづか
しくあらはに近く

くらくあかるくあかるくくらく入り亂れ女あ
えかに玉乘するも



少女等は明るく來たり暗く去り素肌さむざむ
玉乘するも

なよやかに片手をあげて物いひしなかの一人
のかなしき眼はも

冬の夜の江川一座の玉乘の囃のなかのクラリ
オネット

## 深夜

霜ふかき深夜の土をひそひそに歩む家畜をいとほしみけり

冬の夜の深きにひとりめざめゐて土ふむ犬の跫音なつかしむ



## 見た哀しむ歌

あかつきの街上の雪踏みさくみいのち死にたる兒をいとほしむ

街上の雪まのあたりあかあかと朝燒のしてあけにけるかな

朝焼のはるばる赤く流れたる雪の上をゆく心
ひきしまり

ほのぼのと生れてやがて死にゆきしわが兒を
思ふ朝焼の街

産科院の濃青の屋根につもりたる雪をもそむ
る朝焼あはれ



*

うすあかみほのかにのこる死顔の女兒(をみな)なりし
をいかで忘れむ

ましろなるふらんねる着て抱かれしうす紅き
頰の吾兒の死顔

きれながのとぢし眼のほのぼのとひらくを思
ふ親心あはれ

きさらぎの地上の雪の光りけり吾兒の柩に釘
うちにけり

はだら雪はだらにかきて夕あかりわが兒を葬(は)
ふる檜葉の木かげに

兒の柩うづめにければ雪まじりもりあがりた
る春の赤土　二月二十三日



程經てのち

をみなごのほのかにあかき兒の顔の今は凍ら
め雪のしたにて

紅椿みれば吾が兒の來ていねし一夜の夜着の
眼にうかびくも　生れて一夜にして死す

日毎妻を病院に訪ふ

夜の廊下歩めばきしみ鳴りにけり更らに寂しく階子をくだる

我が兒いだきてかへる心となりにけり病院のドアの外(そと)の夜の雨



夕燒の空のもとなるわが家に今日もかへらな我が兒とふたり

抱きねする兒の體溫のほのぼのとこころよくなりわが眠りけり

死にし兒もいとほし吾にいだかれて母を忘る兒もあはれなれ

何もせなく兒と遊びほけ兒とねむりあくれば
さびし朝燒の樹樹

妻あらぬ日の朝燒の冬青の樹の梢あかあか朝
あけにけり

夜の路抱き歩みせし兒の足袋のぬげたる足の
冷たかりしも



ある日、妻の家にあづけて
町に行きしとき

吾の顏ぢつとみつめて泣きいづる我が兒よ父
を忘れてありしか

忘れゐし父の歸りて來にしかば汝れや悲しく
泣きいでにけむ

眞竹藪

ひた吹きに眞竹藪吹く夕あらし眞竹なびかひ
日は漂ひつ

赤らかに濁る日輪地になびく大竹藪のうへに
光らず



ほつとして土間をいづれば南風強吹く藪のた
だならずして

地になびき伏せば明るく忽ちに更らにもなび
きかへす大藪

竹と竹ともずれ鳴りのしづまれば空にすぐ立
ち音なかりけり

いまも猶裏竹藪に入るものかふるさとの家の
春の入り日は

*

槇の木のかげなる土のくろくして冷たきをふ
むわが家の庭に

地(つち)ふかくわき出づる水のふるさとのにほひ愛(かな)
しみくちふくみける



ふるさとの掘抜き井ゆたぎつ水うましうまし
とのみにけるかも

大麥のほきる畠の畦道に春日のてりて吾をゆ
かしむ

以上四月、相模に歸りての作

五月の空

五月空あかつき霽れつ赤き日ののろりといづ
るゆづり葉の上

丹のいろの新芽をかこみゆづり葉は青やかに
濡れ若葉しにけり



放膽にはつ夏の日はてりわたる青ゆづり葉の
青の若葉に

一本の青のゆづり葉丹の芽ふき日はあざやか
に夏を示しつ

はつ夏のつめたき雨にびしよ濡れにぬれたる
犬の餌を乞ふあはれ

毛並よごれし犬はもさびししほしほと濡れし
からだを吾によするも

朝おきて一ぱいの水をくみあげつたをるまし
ろに浸しけるかも

充分に水をふくみし白たをるたをるを顔にあ
てにけるかも



よごれたる花をさびしとおもひしに苺はみの
る葉がくれあかく

亡き兒を憶ふ一首

ひつそりと土もりあがり今かあらむわが兒の
墓を久しくもみず

夏鶏

ひつそりと鶏ら頸よせゐたりけり水無月青樹色ふかむ暮

頸よせて眼と眼かたみにみいるらしかうちんの雌のひそまれるかも



茶の色の光りふくめる鶏の胸ふくらめて地にうづくまる

日はここに光おくらぬ鶏舎のなか卵をうまぬ夏鶏の群れ

夏されば卵をうまずその腹の燬くるを鶏ら感ずるらしも

つめたかる夕べの地に腹ひやす鶏の一羽を久しくみいる

こうちんの重きからだのうづくまり嘴を翅にうづめひそまる

夏鶏ら外の光のあかるみにむかひて鶏舎に暮れひそみたり



## 地を敲く雨

しやしやしやしやしやと地上を敲く夏の雨身近にききつ向日葵を植う

大粒の雨こころよし現身の素肌をぞうつ空よりきたり

六月の夕近き空ゆ音たてて地上にそそぐ雨に
背をうたる

久しくもふまざりしとてしみじみとふみたる
土の足ざはりはも

我が足にふまれしゆゑに我が足のもとにてく
づるる土の親しさよ



土まみれになりし我が手は向日葵のま青き莖
を手握(にぎ)りにけり

くろぐろと掘りかへしたる新土(あらつち)をたたきてや
まず大粒の雨

赤さびし鍬の刃につくしめり土足の指もてぬ
ぐひたりけり

## 井戸

着物黒く着たる男のずつしりと吊られて深く
井戸に入り行くも

濁りたる男のこゑの地の底ゆ深くこもりてひ
ひぐ間遠に



## 卵黄

たへがたく悲しき心、眼つぶりつのみくだした
り卵黄ひとつ

眼つぶりて草に座りてありければゆくらゆく
らに心は揺るも

そここに松ある岡の横臥してくろみしづまる夕日の村は

家なかばくろき砂地にたてさして人かへりけり松山の下

物思ふ心は地にをりながら猶青空をみもるなりけり



七月三日、小舟町河岸所見

潮ひきて土泥あらはに流れたるうへに傾く腹赤き船

潮ひきし故に赤かる腹みせて傾く船か眼にさみしけれ

腹赤き船に人ゐず太陽はほしひままにも照り
極みけり

かがやく雪

大正四年

自大正四年一月
至大正四年三月

雪晴れし日、野の中に馬ならいする人をみる。

太陽はほのぎらひつつのぼりけり、馬、圓(えん)をゑがく雪光る野に

すぐろ馬裸馬こそ日の雪のかがやくなかに圓ゑがき馳す

若者はジャケツをきたり手綱とりて馬走る圓
の中心に立つ

日のけぶる雪の野面に青空のはるけかりけり
馬、圓をゑがく

人も馬もともに光りてめぐるなり雪はらはらか
に日に散りにけり



大空の青のもとなる雪光る野は一枚の白金な
れや

若者の手綱強牽きふる鞭のひしと音して馬さ
らに走す

＊

しみじみと心の底をながれたる生命つめたく
空あふぎけり

冬空に寂しき水の音たてて妻が物あらふ日の
かげりかな

ききあれば心さびしもさむざむと空のもとに
て物あらふ音

年のはじめの空はからりと霽れたれど心にふ
るる物あらふ音



慰さまず野の入口に歩みきぬ野木二三本幹光
りたり

あをじなく野の木がくれを歩みけりつめたく
光る青空の色

*

夜ふかく窓をあくればながながと殘雪は地上
によこたはりゐし

## 家鴨

一群れの家鴨ましろく光りつつ尾をふりあり
く何か淋しく

家鴨家鴨に押しかさなりつ地にまろび日光の
なかに翅(つばさ)を鳴らす



## 桑畑

頬白の鳴きほけてゐる桑畠桑の梢のかぜに撓(しな)
へる

一面に青空を刺す桑畑の桑の木をみる心はさ
びし

坂下の青麥畠

坂下の青麥畠人むれて家たつるあり春日四方にあかるし

青麥を大きなる黑き素足にてふみにじりつつ材木はこぶ男



大鴉に似たる男は白光るむなぎの上に大槌をふる

しらじらとむなぎ光りて青空のもとに立てるをよしと槌ふる

家建つる人々のなかの一人の男素足なり春あさき土

犬二首

我が家の冬木の垣に春を擦りてひくく鳴くなれ犬ぞ夜ふけに

我が家の門のくぐり戸鼻さきにこじあけて入る犬のいとほし



野にて

片照りの日に並み立てる木の間行く毛なみよごれし生きものよあはれ

頸たれてむかうに歩む馬の尾のさびしきかなや日はさしながら

日あたりの幹くろき木によりながらほほじろ
をきくはわがみなりけり

ほほじろよ冬木の梢尖りたる上に啼くかもほ
そぼそと音に

ほそぼそと啼く音の鳥をききながら枯野の日
かげ恍惚とみる



麥さく

畠より路にいづれば足あとの土くろぐろとの
こる大きさよ

ふるさとの相模に生れし野ごころのかへりく
らしも畑の土ふむ

わがまへもうしろも青き麥畠麥畠みな空の下
なり

まつすぐに土あざやかに麥のさく切りつつ男
向うに行くも

麥さくを切れる男の股引の黑きがうごく青麥
のなか

椿二首

西風は西よりきたり日もすがら日向の椿たわ
わにも搖る

西方にむかへる青き葉叢のみ風きて搖りつ椿
しづかなり

春淺み

春あさみ射的場の土手のたんぽぽの色もうす
らに咲きいでにけり

土のにほひ

大正四年

自大正四年三月
至大正四年五月

三月二十四日、伊豆に病弟を訪ふ

危しとききて夜をねず晝食まず浪青き伊豆の弟をおもふ

蜜柑畠青きが伊豆の東方の山をいろどる春あさみかも

青海を木の間にのぞむ崖上の停車場につきぬ
伊豆はかなしや　熱海

東京よりもとめ來たりしさくらんぼの鑵の口
きる春の日のくれ

昨日より二十日の生命限ぎられし生命と知ら
ぬかなしき弟



更らに三月末、小田原に病弟を訪ふ

トロッコを押す人くろき埋立地のむかうにう
ねる波青き海　品川にて

うす青み流るる川の水上の相模平に春日があ
たる　馬入川にて

漁夫等は一列ながく海を背に干網手繰る春の外光　以下小田原海岸にて

濱いつぱいにひろげられたる色赭き大ぶり網のうへの太陽

赤き日はまうへなりけり漁夫等は大干網をひた手繰るなり



草山の黄なる麓のところどころ蜜柑畠の冷たく青し

青海の春の青魚日の濱にをどるをみれは生命を感ず

軟き線をゑがける草山の二つかさなり春の鐘が鳴る

三月末の日の午後二時、小田原海岸の寓居にわが弟は眠りぬ。

かがやかに地上草木光りけりをととは若くみまかりにけり

生きの身のぬくみほのかに殘りたる弟をあはれ入棺(にゅかん)しにけり



葬具屋の人夫きたりて汝が柩手荒く結(い)はふこの夕闇に

どかどかと人夫きたりて家の内踏み散らしけり弟よ許しね

弟よ旅なれば汝がしづかなる淋しき顔に布(ぬの)をおほはしめ

夜、月明晝よりも明るし、弟の
柩を山上の燒場におくる。

海草のにほひにまじる月光の煙れる道を皆う
なだれつ

月赤く海よりのぼりほのぼのと燒かれにいゆ
く柩のひとつ



山上は月あかかりき高張の大提灯のほつかり
として

焰はも激しくあがり湧きあがり弟を燒くか、弟
を燒くか

弟を燒く火のほのほ色あかくわが身に近く音
たてにけれ

人間を焼く火のほのほまのあたりみたり弟は
いま焼かるるか

遠ざかり一樹のかげに弟を焼く火の赤さみて
ありにけり

*

日は海より生れてあかし弟の骨を拾ふと山行
く吾は



ふるさとの土の色よりややあかき焼場の土の
眼にあらはなり

こはいかに唯色にぶき灰なりきこの灰のなか
弟はゐるか

生きの身は死にて焼かれてうつつなく灰とな
りけり弟をひろふ

あかつきの青みわたれる空のもと弟をひろふ
わがはらからは

ふるさとに歸りて土を踏まましと昨日いひけ
る弟をひろふ

*

四月一日、弟の遺骨を抱きて
ふるさとに歸る。

ふるさとは春日杏(はる)かになびきたり佛となりし
弟をいだく

骨甕(こつがめ)を抱きて行けば春の空雲雀ながれてふる
さと近し

悲しきはふるさとびとの日くろみの頬を流る
る日の光なれ

日黒みのふるさとびとと行きにけり麥畠なか
のしどみ赤きみち

ふるさとの若き相摸よかかる日もいとほがら
なる鐘の音のする



燒け山のすぐろの上の空あをみうつとりとし
て人はかなしむ

四月には二人行かむとちかひける道なるもの
を汝は佛にて

草あをむ水田のなかの白きみち佛となりて歸
ると知るか

我家の槇の大木の青空にすぐろに見えつふる
さとに入る

ふるさとの庭の槇の木枝青く垂れたる下をゆ
きぬ吾等は

ふるさとの相摸の空のもとにして弟を葬る鉦
こそたたけ



## 木蓮

おどろきはなほも我が身にのこりけり空はさ
青に木蓮白し

木蓮の幹は光りて日に白し花はこ青の空に搖
れたり

木蓮の樹にちかぢかと歩み寄り帶しめなほす
妻のうしろで

兒を抱きしゆゑにいささか反身なる妻を愛し
む木蓮しろし

ひとり兒の健かに肥えゆくのみに幸ひなりけ
り白き木蓮



わが父の顏しりそめし兒のこころ、あたたかに
いま抱かれ寢入りぬ

軟かにほのあたたかき生きの身のわが兒いだ
きてありぬ日向に

日のあたる庭におりたちふとのぞく廊下の下
の春の青草

ふるさとの歌

わくらばに生れし家のうすくらき土間にましろきわが下駄をぬぐ

ふるさとの家のうしろの桐畠桐が芽をふき土くろみかも



黒土にはこべもまじるふるさとの水菜畠の雨あがりかな

棕櫚數本かげくろぐろと青空のもとにすみたりそよりともせで

我れを生みし母にはあらぬ母親の敷きてくれにし夜の白き床

古びたる屋根のもとにて久にぬる春の夜ふかみ遠音の蛙

夜ふかくめざめてあれば厩にて身ぶるひをする馬のきこゆる

生れける家の冷たき土間におり春のゆふべの外光をみる



夕あかき庭の方より鶏四五羽くび伸してくも暗き家内に

椿白くうつとりとして物おもふ妹の帶の日に光りけり

とろとろと水の音すもくだかけの尾の日に光る我がみてあれば

裏畑の桐の木蔭の青き葉の野蒜にどよむ日の
あかさかな

すかんぽのまあかき莖を手握れる少年のゆく
ふるさとのみち

ふるさとは山山青くかすみけりどの山みても
日があたりたり



巣につきし鷄をふせたる土間の甕古びて赭く
油にじめる

日没ちかき土間におりたち巣をあふぎ頸のび
やかにうかがふ鷄ら

麥畑の青きにほひをはこびつつたそがれごろ
を巣にかへる鷄

すかんぼの莖かみにつつ草にゐて行く春の日
を赤しとおもふ

たんぽぽのほほけしなかにゐひどれのその快
さをおもふなりけり

草にねて青麥の穗とすれすれの空みてあれば
啼くか雲雀は



養蠶小舍のあとの空地の桐の花一もとさびし
きその桐の花

草木の光りのなかに古りて行くわが家をみた
り何も言はれなく

草ふかむ草場の青きひとところ馬ひとつゐて
あたり明るし

馬鈴薯のましろなる芽のむらがりの箱いつぱいにのびあがりたる（納屋の隅）

納舎の隅物あり白く光れるは馬鈴薯の芽のむらがりなりし

窓

大正四年

自大正四年五月
至大正四年七月



病院控室

底深く澄める鏡におのづからうつれる吾の顔
ひとつ暗し

鏡のなか鋭き眼して此方みるおのれの顔の冷
やかにすみ

日光のそそぐがもとに幹白く白楊（ポプラ）ななめにゆ
らりと光り

假植ゑの白楊（ポプラ）ななめに若葉してきほやかなれ
や空のもとなれば

窓硝子一面光る直ぐそとのほりかへされし赭
土あらは



扉（とびら）を押せばこなたへと椅子を指さしし老院長
の尖りし指さき

院長ぞ鉛筆赤くわが胸に線をひきたりこころ
よかりし

窓ぎわの白き寝臺に吾はいねつ右肋膜を打診
されにつつ

胸あらはに打診されにつつ硝子戸を透してみたる空のひとひら

憤ろしく扉をひらきていでにしがしつくい白き窓によりにけり

わがはきし草履のうすら汚れさへいきどほろしくかなしまれけり



蛇うつ男

大空のもなかにかかる日のもとに大男ゐて蛇擲ちにけり

赤き日の光りながるる刈麥の畑に蛇擲つ男をみたり

日のもとに蛇をむちうつ農人の強きこころに
同感するも

刈り干せる大麥畠しんとしてまひる日ぞ照り
わがましたなれ

かたはらにつばなほほけて日に光り日はこと
もなし蛇殺し終んぬ



おのれはも憤ろしく大麥を刈り干せる畑のな
かゆきにけり

麥畠一枚二枚あちこちに刈りのこされて野は
まひるなれ

甘藷(い も)蔓のむらさき深くのびにけり刈りほされ
たる大麥畠

## 桑畠

ゆらゆらに刈り倒し行く青桑の日になびかひつ倒れて青し

桑畠だんだん畑の熟麥の赭きがうへに青くなびくも



五反歩の桑畑に入り日の色を吾もあふぎつこころよろしく

男等は數人ならびて青草に鎌とげりけり天つ日のもと

數人竝びて鎌研ぐ男六月の日のましたにて利(と)鎌(がま)ぞにほふ

甲斐桂川行

鵜づかひの男河原におりたちて水面をみいる、
水はくらかり

ひとところ水おともなく流れ去り更らに光り
て淀むなりけり



目なし籠の中より頸をつり出され黑き鳥こそ
河原に立てれ

空あふぎ翅ひろげてはばたけどよろめく鳥の
啼きもせなくに

ほのぼのと遠き水面のうつりたる鵜飼の火こ
そややに赤けれ

遠あかき鵜飼の火こそ寂しけれ瀬の音小暗き
河原を歩む

榛名、赤城の歌

大正四年

大正四年八月、榛名、赤城兩山にあそびてうたへる歌

榛名湖

氷小舍ひつそりとして黒き馬大戸の前に尾を垂れにけり

霧しろじろ山をくだれば麓べの氷の小舍の地にひそまりつ

氷小舍のなかに氷をひく音の鈍くひびきつ霧ふかし、晝

霧ふかし櫚葉木立のむら立ちのかたへに湖のただよひにけり

日はかがやか草かがやかにたてるみちもだして行けば石竹赤し



高草の日になびきたる湖邊行き石竹の花を火かとおどろく

赤き桃とろりとしたる湖の水にうかせてみとれてありしも

赤き桃口をひらきてくらひけり日をうつくしとあふぎけるかな

榛名富士のふもとべ湖の岸近き青草のなかの
家は誰が家ぞ

一樹あり青葉ふかめるその下に誰ぞか住むら
しむしろ戸のみゆ

すずらんの花、すずらんの花、そここに霧しろ
きなかになびきあひにけり



白樺の林

白樺の幹すぐすぐとむらだちて山ふかむとこ
ろ日は杳かなれ

我が前のましろなる樹を白樺と知りて直ちに
手ふれけるかも

白樺のもとによりそひ打ちあふぐ秋近き空の
色のかなしさよ

樹に對ひあれば心はつつましくやがてかなし
くなりはてにけり

霧うすら流るる山にかがよひつ立てる樹あり
て幹ましろなり



山上濃霧

ゆらゆらに霧ながるればわがふめる山をおそ
るる心臆して

白樺の繁葉の枝を折りもちてゆらゆらに霧にゆ
られてゆくも

山上の一樹に霧のながれ去り空あをみゆくら寒さかな

霧ふかき白樺林ひそまりてまだら牛ひとつ大きかりしも

*

うかがへば林のおくの木の間よりけだものの眼の光りけるかな



けだものの匂ひただよふ山上のすずらんの花をいとほしみけり

けだものの蹄のあとのくろぐろとのこれる山の草の色淡し

赤城なる大沼を今みる白樺の木の間に青き大沼をいまみる

## 小沼の歌

こころよくたのしくやがてわが心かなしくなりて小沼をぞみたれ

小沼のほとり木木みな青く空をさす小沼は大魚の眼に似たりけり



たのしかる無爲の心にかへりけり小沼のほとりに日の色をみる

白樺の林いづればしんとして青沼はそこに吾をまてりき

あかあかと沼の底ひに日輪のくだりておよぐ眞晝なりけり

この無爲の心いとほしみ山上の青沼(あをぬ)にみほれ
草しきにけり

＊

山まろくさ青にながれましろなる牝牛草はむ
その麓べに

白き牛肥えしが乳房ほのあかみひとつ離れて
草はみゐたり



日かげ濃くうすくまだらに流れたる青草山を
越えきし牛か

わがめぐりつどひ來れる野馬(ま)の眼のつぶらに
すむにややおそれけり

＊

一もとの幹しろき木の秋風にふかれてなびく
山の入りつ日

山上新秋

乳色の花むらがれる一もとの木をおそれけり
山ふかくきつ

しんとしてたてる深山樹むらがれる乳色の花
は梢におもし



白樺の皮剝ぎあれば秋の風かほそく梢ゆりゆ
きにけり

わが着たる蓑に來て鳴る山風に秋をおぼえて
山越えありく

あふむけに青芝の上にいねたれば日がぽつち
りと赤かりしかも

一面に日はてりわたりなめらかに草なびく野
にわが裸なり

あふむけにいねて日をみるわが顔に霧うすら
かにふれゆきにけり

くろぐろと山あらはるる西方の空なつかしみ
涙をながす



山ふかく日の沒るところたわわなる青き木の
實の地におちにけり

日の光あかるくこもる草間より蝶蝶うらうら
まひのぼりけり

すずらんのまじりて白き草間より日の幻か蝶
蝶わきのぼる

うつつなく物をおもひて歩みしに蝶蝶むらがり日にのぼりけり

鈴蘭の花にほはしき麓べの青草の上にいねてしまひぬ

山山に夕日ながれてあかるきにみほれて人は物いはぬなり



はつ秋の山の青空ひととところうすらに染めて夕風の吹く

山腹（さんぷく）の白樺林ましろなる折れ木をぞ吹く初秋の風

歸路

麓べの新墾(にひばり)村の藁小舍の屋根の上なるすゞ蘭
の花

鈴蘭の花ほのじろき藁小舍のうら若き娘(こ)の眼
はつぶらにて



わら草履、しろき踵(かかと)をあらはにもみせて娘の小
走りにつつ

桑の樹の上に桑つむ山少女秋風のきてゆりゆ
きしかな

桑の樹を風來て搖れば山少女しかすがにその
身さゆられてあり

秋より冬へ

大正四年

自大正四年九月
至大正四年十二月



秋風の歌

ほし竿の我が兒のネルのましろなる寢卷吹き
行くはつ秋の風

なまぼしの水をふくみし兒の寢卷とりいれに
つつ秋をおぼゆる

しほしほと思ひあまりて歸り來し父に抱かれてほしといふ兒よ

思ひあまりてそこにいぬればぬる眞似をわが兒のするに愛しみやまず

わが兒いまだ父の怒れる眼を知らずされば わらひていだきけるかも



とんぼきてとまらんとして吾あるにおどろきて去りぬ、あとの秋風

ながき尾を地に垂れにつつわがあとをつきし犬よかへり行くかも

子をいだきてそが家の前に淋しげに立てる男の彼處にもひとり

わが生きのいのちの上をまばゆくも流れて秋の日に光る風

ひつそりと百日紅の花おもく垂れたるもとを夜半にとほりけり

病みてぬる妻を障子の硝子越我が兒とのぞく初秋の朝



兒をいだきて家をいづれば秋風のそらに流れて夕燒けにけり

大空をみいる我が兒の顏あかくほのかに染む る秋の夕燒

兒を抱き歩みてあれば秋風は路傍の木よりわがそびら吹く

秋の風百日紅を横なぐりに吹き去りにけり、朝ばれの空

＊

干草をかきあつめゐる岡の上の男大きくみする夕日かげ

干草をかきあつめゐる男ありて烟突は太く野に立てりけり



この兒はも驚き易くひとりしてしばしもあらず誰れに似つらむ

かなしげにわが枕べに坐りゐて泣く兒みいでしはつ秋の夜半

## 市ヶ谷監獄

秋の町ゆくへも知らに行きければ煉瓦塀そび
ゆ我が眼に尖り

煉瓦塀角なす彼方日のもとにぽつかりとして
烟突赤し



赤煉瓦同じ色なす烟突のさらにも赤く日をう
けにけれ

監獄の煉瓦塀のそとの看守小舍よろひ扉暗く
とざされゐたり

監獄のなかよりおつる水の音地下の水路をわ
がのぞきみる

煉瓦塀にそひてながらに行きければ赤錆びし
鐵の塗戸をみたれ

鈴がしろくぽつちり二つ塗戸のわきの土塀に
並びことなかりけり

煉瓦塀の下の青芝秋あさく青きをしきてみい
る大空



ふとぶとと眠る烟突日にむかふかたのみが赤
し秋の監獄

煉瓦塀の角の地べたに犬くろくうづくまりゐ
て日はまうへなり

洋傘の尖もて強くつきにしに鐵の塗戸の反響
かなしも

秋二首

うす甘く物のするゆくほひして秋あさき日の
鳳仙花かな

鳳仙花女となりし小娘のひそかにみいるいぢ
らしさはも



冬夜二首

下女部屋の夜の寒さにはしためのなにささ
さと音をたつるかも

下女部屋のくらきにこもりそちむきに壁みて
ゐるかみぞれはふるも

カフエーにて

わが兒はもましろき麵麭のひときれをいかに
うれしく口ふくみけむ

一杯の熱き珈琲のしみじみとわが腹に沁みし
やはせなりけり



冬のかはたれ

むせつぽき紙埃(かみほこり)きて顔をうつ製本所の冬のか
はたれのころ

折紙のつまれし上にわがくらき心をしばしお
きにけるかも

# 富士山麓の歌

大正三年

大正三年八月下旬、富士山麓に遊びてうたへる歌

西湖

樹海樹海、青き壺なす湖光り湖の彼方に樹海をのぞむ

日にはるばる眼にあをあをと一面に樹海ぞけぶる富士の麓べ

青き壺なす湖のただなかわが乗れる船の帆布のはためき鳴るも

山山の迫れるもとをすぐるとき湖はしづかに眼をひらきけり

一面の黒き熔岩日にい照り限り知られず湖岸原は



わが前を押默り行く船頭の腰の大鉈日に光りたり

すぐろなる熔岩原に立ち枯れて白く光れる樹の悲しさよ

白白とかがやく疎林さびしきは心の底に沁みわたりけり

眼とづれど眼ひらけど疎林立枯れの疎林しら
じら日に光りたり

熔岩原の白樹の疎林、青きもの眼にうつるなし
白樹の疎林

むらだてる白木立こそ悲しけれ熔岩原を秋風
の吹く



まことにわが心孤獨なりけり熔岩原の白枯れ
の樹によりそひて立つ

船頭は熔岩のかげにうづくまり大きなる眼を
われにむけしも

乘り捨てしわが船小さくただよへる熔岩原の
はての青湖

熔岩原の岩の裂け目にほそぼそと匂ふ秋草わ
がつみかねつ

わが投げし岩のかけらのこつかいとりと音たてに
けり熔岩原は

初秋の湖の渚べ毒草の實にそまりたるわが手
そそぐも



川口湖

船底に砂のするるをききしときわれおりたち
ぬ夜の渚に

洪水後の山よりおつる水しろく暗きにひかり
夜を高鳴れる

夜の川とどろとなれる方に行く川口村はえな
のごとしも

*

幹しろき樹が立てりけりわが宿る馬小舎に似
し宿屋の庭に

石山の空にひかるをながめつつ朝さ青の淺川
わたる



淺川の河原ましろき日の光わが足袋ぬぎて水
わたりけり

ちらちらと光ただよふ水の面わが足底を沙の
ながるる

川底を流るる沙のうすひかりわが足ぬれて魚
のごとかり

そここに小石まじりの桑畠秋の出水の走り
てゐたり

ちかよれば露にぬれたる露草のむらがりなり
き湖ぞひの道

*

日の反射あかかる山のふもとべの湖にさ青の
魚をどりたり



日の反射はげしき山をあふぎつつ黒き洋傘ふ
かぶかとさす

山くづれしたる赭山はだか山彼方にみえて湖
ひかるなれ

莖あかき蕎麥の畠をながれたる水のあさどに
足ひたしけり

わが舟は渚はなれぬふとみれば水の底ひに畠
青くみゆ

湖の水はあふれて黍畠水の底ひになびくなり
けり

水あさき川口の湖のあさみどり富士あらはに
も秋風の吹く



裾野

裏富士の大きなるかげ野におちてゆふべはろ
ばろ秋風の吹く

梨子はむと富士にむかひてひらきたるわが口
を吹く初秋の風

秋の風裾野をわたりたそがれの玉蜀黍畠みな光るなり

わが行ける玉蜀黍の畠よりつと眼光りて馬の顔いづ

枯草のにほひのこして黒き馬わが前をゆくにしたしかりけり



行けど行けど玉蜀黍の穂の光り富士あらはにも夕焼したり

初秋の富士の麓野に銀の波いちめん光る玉蜀黍畠

玉蜀黍の銀の穂波に顔ふれて行けば裾野に秋風わたる

秋風にふかれて麓野行くときはわが身も光る
もろこしの穂に

黒馬の脊に手をおけば忽ちに獸の肌つと動き
たれ

發生

大正三年

自大正三年九月
至大正三年十二日



水底の魚

うす青みしづかに魚の光りつつ初秋の夜はぬれわたりけり

魚の脊は青き縞なしその腹はなめらかにして光りを放つ

うす青くうろこの光る海の魚わが手握(にぎ)れば冷
たし魚は

海の魚ほのかににほひ横はる夜の厨にこほろ
ぎ啼くも

魚はつめたく夜を光りつつ横はる水桶に水は
たたへられたり



秋の水たたへられたる水桶に魚を放てば水あ
ふれいづ

静かに、静かに水の底にしてこの夜を魚の腹ひ
かるなり

こほろぎが啼く音ながれて桶の水しづかに暗
く光をふくむ

とあるとき

のびろなる空地(あきち)ながむるここちして我が來し
かたの眼にうつりくる
青空を遠く仰ぎて椅子の上にわが生れくる兒
をおもふなり



川楊

川楊野より折り來てつきさししか黑き土に根
をはりにけり

新芽をばはさめど摘めど青やかにさらに芽を
吹くこの木のうれしさ

のびやかに芽を吹き芽を吹き忽ちに枝ひろ
りしこの川楊

はさみきり切れば切るほどその枝の力みなぎ
り芽を吹く楊

*

日の光りいつぱいにまろき松の木の青葉にそ
そぎ秋たちにけり



初冬の公園

すずかけの廣葉黄に散る公園の入口にして冬
をおぼゆる

初冬の公園の木の間木の間行き青空にあるが
噴水をみる

わが前を背(せな)みせて行く黒まんとの男の靴の大きなるかも

冬の日のまきちらされし落葉(らくえふ)の樹の間樹の間の素木(しらき)のベンチ

すずかけの黄なるひろ葉にみいりつつ素木(しらぎ)のベンチ凭れば冷たし



男ありベンチにからだもたせつつわれに冷笑をあびせけるかな

公園の展望臺にのぼりけり今ぞ初冬(しょとふ)の日に烟る街

揺れやまぬ遊動圓木にわが心のりて揺られて冬の日ぬくし

## 淺川村及び高尾雜詠

村娘あゆむまにまに帶あかくゆるむやうにて
片側田圃

秋風の流るる道のかたへなる黃菊の家をわが
のぞきみる



淺川は日に光り流れ淺川は日に光り流れ山黃
ばみたり

あかあかと赤松立てる夕日山あふぎつ吾等谷
底をゆく

一樹ありぱつとあかるく日に燃えて黃葉した
り綠樹のなかに

何といふこころよさぞも杉木立幹なめらかに
天走りたり

何といふこころよさぞも白護謨の軟かさもて
立てるこの木はも

山上にのぼりてみやる麓村うれしかなしや太
鼓が鳴れる　はやし太鼓



秋山のあかるき秋のかはたれに吾等太鼓にき
きほれにけり

ひともとの若木さくらの黄葉(もみぢ)して立てるを友
よみてあるなかれ

村の娘(こ)のわかきひとりのふところで白菊をみ
る秋のかはたれ　歸途

## 發生

まはだかのわが兒まろべる白き床ほと朝あか
りただよひわたれ

まんまんと無色透明ほの光る湯ぞたたへたれ
吾が兒の爲めに



空間に魂逃げて去ぬるがにわが兒おどろくま
はだかなれば

生れしはあから肌なすつぶら眼のをのこなり
けり感謝しやまずも

ぱつとひとり光明界にをどりいでしあから裸
兒こゑたかくなく

わが兒よ汝(なんぢ)が母はやはらかき微笑(びせう)のなかにいま眠りをり

九月なかばの燃燒性の外光の樫の木に燃え吾が兒ひたなく

生みたるものは母親として安らかに夜を眠れりわが赤兒抱(だ)く



いだきつつあればわが兒のほのぬくみ身にほのぼのと嬉しかりけり

人間の發生のさまを今ここにあきらかにみつ心苦しも

母に似しその唇のうす紅さその眼つぶらに汝は父に似る

青樫をすべりてこなたながれたる秋の日ざし
に吾が兒ぬくめつ

抱きかかへ秋の日向にいでにけりはじめて日
光に吾が兒ふれしむ

日光のなかにただよへ青空にただよへ吾兒の
いのちのほむら



わが小指わが兒の小さきたなぞこに手握らし
めつ父なるものを

乳の香のしみしガーゼのいやしろく冬の日向
にほんのりにほふ

いつしかにわが身にうつりしみにけむ赤兒の
にほひ冬日のにほひ

人間は子を生みなしておどろきの深きを知ら
む人に語りそ

とあるときは光にひたる和魂(にぎたま)のにこやかにゑ
む吾が兒うれしみ

妻も肥えわか兒もこゆる初冬のあたたかき日
に日向ぼこする



初冬の空

公園の樹に並みたてるかはたれの初冬の空の
うすあをみかな

ひえびえと身にしみくるは並みたてる樹の間
樹の間の薄暮の光り

ここに來てうすみづいろのたそがれの空の色
みる路傍のベンチ

わがめぐりは黑き樹のかげその樹樹のむかう
に光る水あかりかな

あかあかとあたさかさうに灯のかげのうつれ
る窓をわがあふぎけり



日比谷の冬

公園の展望臺にうつとりと街をみおろす一望
の冬

展望臺にのぼりてみたる寂しさよしろじろと
して建てる建物

枯草に物はむ鴉人をみて怒るがに太き嘴あげ
にしか

冬鴉一羽鋭く地を堀りて人をおそれずその嘴
光る

冬木立木立のなかの黄に烟る芝原ひろし鴉ひ
とつゐて



薄暮

陸橋の上にて友と別れけり遠山のいろゆふぞ
らの色

冬の宵の街のにほひを身にうつしかへりきに
けり灯あかき家に

深林

終

大正五年九月五日印刷
大正五年九月十日發行

特製　壹圓廿錢

予九百十六年
歌集　深林
不許複製

著作兼發行者　東京府豐多摩郡大久保町西大久保貳百四十七番地　前田洋三

印刷者　東京市小石川區西江戸川町二十一番地　細萱武四郎

發行所　東京市外西大久保二百四十七番地　白日社出版部
（振替東京二六一六三）

## 前田夕暮著作目錄

□收　穫（歌集）　明治四十三年三月
□陰　影（歌集）　大正元年九月
□生くる日に（歌集）　大正三年九月
□黑　曜　集（選集）　大正四年四月
□歌話と評釋　大正三年一月
□短歌雜話（近刊）　大正五年十月
□發　生（白日社歌集）　大正四年三月
□外　光（白日社歌集）　大正四年六月

□詩　歌（白日社機關雜誌）　明治四十四年創刊